



観光物産センター

広いスペースに、河内で採れたみかんやのりなどの特産品が並ぶ。その中でも目を引くのが、白陶石のボトルに、南国の輝く太陽と赤く咲きほこる花を描いた「アランシア・ソル」。良質な河内の温州みかんを使った、世界でただ一つの「みかん・ブランデー」だ。

ほのかな柑橘系の香り、みかんブランデーアランシア
ミカン畑をぐるりと回って、河内の町中におりてくる。山手側のあたりに赤いトンガリ屋根のかわいい建物。四月にオープンしたばかりの観光物産センターである。中に入ると、天井近くまである大きな窓から、あたたかな陽がふりそそいでいた。



樽詰めされた原酒

みかん狩りを楽しむ……



太陽の恵みを得る・ミカン狩り
峠を越え、有明海へと向う。周りを囲む丘に、橙色の実が光り始めた。道路のすぐ傍らから頂上まで、ひな段のように一面、ミカン畑である。道すがら、ところどころに観光農園、ミカン狩りの看板が出ている。

入園料を払い、紙袋とハサミをもらってひな段の間の径を登っていく。陽がやわらかく斜めにさす中、太陽の光をたっぷり浴びて色づいたミカンが青い空に美しく映える。太陽の色をしたその実を一つ握り、あたりにさわやかな香りが満ち、ひと袋口にくくむと、太陽の匂いがするようだ。甘い。

ほのかな柑橘系の香り、まろやかな口あたり。ブランデーの蒸留所はこのすぐ向いにある。
蒸留所は思ったより小さく、ほとんどをレンガで囲まれた高圧蒸留機が占領していた。この蒸留機で蒸留された原酒が樽詰めされ、じつくりと数年間寝かせられる。うす暗い貯蔵庫に寝る樽の中で、河内に降りそそいだ陽光が、長い時間をかけて凝縮されるのだろう。陽が沈みかける頃、海沿いの道を走れば、有明の海はみかんと同じ色に染まり静かな波をたたえていた。



河内のみかん山から有明海を望む

熊本市の西北に隣接する河内町。金峰山、二ノ岳、三ノ岳という三山のすそ野から広がる町並みが、波穏やかな有明海へと続いている。なだらかな丘陵は一面のミカン園。潮の香をかすかに含んで吹く風も、オレンジ色に染まっただけのような、そんな気がする町である。

今に残る「文豪」の足跡
「オイと声をかけたが返事がない……」で始まる、夏目漱石『草枕』の有名な一節。この場面の舞台が、河内町の山手の玄関口、金峰山峠の茶屋である、といわれる。

熊本市内から、金峰山越えて河内に向う道の途中、この茶屋跡に峠の茶屋公園ができています。当時の建物をそのまま再現したというわらぶき屋根の茶屋、売店。漱石の小説そのままに、茶屋の軒先にわらじが五、六足揺れている。「オイ」と声はかけなかったが、中に入っていく。土間にかまどが作ってある。右手の板の間には囲炉裏が切っただけあり、奥に一間、畳の部屋が見える。誰も記憶のどこか奥深くにあるよう

な、そんな懐しい光景がそこにあった。板の間に座って、すすめられた一杯のお茶をいただく。ここには『草枕巻』や『漱石全集』、古い茶屋の写真などが展示されている。また、漱石が歩いた小天温泉への道は『草枕ハイキングコース』となって今に伝えられているという。ゆっくり歩いて、漱石の心をたどるのもいいかも知れない。



河内特産みかんブランデー全種



ふるさと紀行

太陽の恵みの里

河内町